

# 電子計算機の運用管理の機械化

## <電子計算機の管理業務の省力化>

本店情報システム部

<要旨> コンピュータの利用形態は多様化し、運用業務を人間の技能や経験で対応することが困難となってきたので、昭和55年からスケジュールと操作指示書の自動作成の準備処理から運行制御まで運用業務全般の機械化に着手し、昭和57年から実用化したのでここに概要を紹介する。

### 1 開発の目的

汎用電子計算機は、相互連携の必要があるオンラインシステムの分散化、業務処理の大規模化および他システムとのデータ交換の拡大などにより運行形態が複雑化し、運用部門に次の問題点の発生が予想された。

- (1) 計算機の設置台数および業務量の増加による要員増加
- (2) 業務運行の複雑化による操作ミス
- (3) 地域分散による運用情報の散在および操作方法の不統一

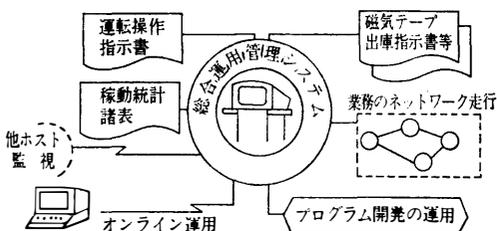
これらを解決するため、総合運用管理システムの構築を図った。

### 2 総合運用管理システムの概要

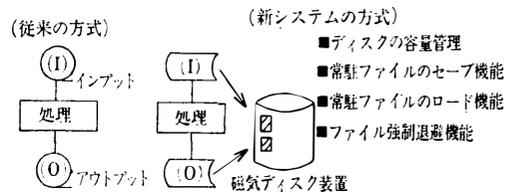
運用業務は、定常業務、プログラム開発およびオンライン運用に大別でき、当システムの果たす機能は次のとおりである。(第1図参照)

#### (1) 定常業務の運用

定常業務の運用はすべて当システムのもとで行われる。スケジュールの決定と指示書の自動作成、磁気テープの自動割り付けに加え、ファイルのディスク常駐化機能(第2図参照)、さらに業務処理の流れを制御する運行管理を行う。



第1図 運用管理システム概念図



第2図 常駐ディスク運用

#### (2) プログラム開発の運用

ファイルの自動割当て、操作指示書の自動作成の機能により、遠隔地からのプログラム開発が容易となった。

#### (3) オンライン運用

分散設置した計算機の相互監視機能により、オンライン専用機を無人化し、障害発生時に即応できる体制を可能とした。また、数百台の端末機の運用(開始・終了画面の送出、延長利用申請の受付)の自動化を図った。

### 3 開発効果

当システムの開発効果は第1表のとおりである。

第1表 開発効果

効果	内容
要員抑制効果	運転員10名、スケジューラー4名の要員抑制
操作性の向上	起動操作の省力化によるミスの減少
情報の一元管理	運用管理情報の抽出の容易性および標準化

### 4 あとがき

当システムの適用によって、コンピュータ運用の省力化が図れたが、今後、より効率的な自動運転を目標に、総合自動化システムの開発を計画している。

(システム計画課、電子計算所)